

聖書:エペソ人への手紙1章15~23節

説教:キリストのからだである教会

はじめに

手紙を書くとき、どんなことをどんな順番で書くか。おおよそ頭に描いてから書き出します。パウロもそうでした。まず最初はあいさつと自己紹介で始める。二番目に聖書の基本的な教理を書く。そして三つ目は具体的な適用を語る。パウロの手紙はいつもそんな順番になっています。今日見ていくところは基本教理の最初の部分になります。前回は「キリストにあって」という聖句に目を留めながら、キリストの血による罪の赦し、御国を相続すること、そして私たちのうちに住んでくださる聖霊の働きを見てまいりました。神の側から私たち罪人に対してという視点です。では、いつも神から私たちという一方的な流れなのかというところではない。反対の方向がある。すなわち私たちの側から神の方に向けてという方向です。結論から言えば、私たちがキリストのからだをつくり上げていく働きです。いったいそれはどういうことか。ともに見てまいります。

1 心の目がはっきり見えるように

1) 神の召しによって与えられる望み

パウロはエペソ教会のために、17、18節で「神を知るための知恵と啓示の御霊が与えられて」、「心の目がはっきり見えるように」と祈っています。いったいなにが見えるかということで三つ挙げています。その一つ目が18節です。「神の召しにより与えられる望みがどのようなものか、(心の目で見えるように)。」

私たちは神から呼ばれてイエス・キリストの十字架のもとに来て、そこで罪の赦しによる救いをいただきました。しかしいただいたのはそれだけではない、もうひとつ「望み」もいただくことになった。この「救い」と「望み」ですが、救いは、地上に住む私たちへ神が天から送ってくださった、上から下への方向がある。ところが「望み」は、私たちが下から上へ、神に向かってあこがれていく。「救い」とは反対の方向になります。

でもどうでしょうか。「望み」というのは、必ずそのとおりにになると信じられれば「望み」ですが、なかなかそうはいかない。「望みをいただいている」と言われても「本当だろうか」と疑うことが多い。どうしたらよいのか。パウロは、「心の目がはっきりと見えるように」なれば望みがよく

わかるようになると言っている。ではどうしたら心の目がはっきり見えるようになるのか。それが次の問題になります。このことはまた後で触れることにしましょう。

2) 聖徒たちが受け継ぐもの

「心の目」で見るものの二つ目。「聖徒たちが受け継ぐものがどれほど栄光に富んだものか、(心の目で見えるように)。」

14節の「聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です」とあって、これと結びついています。聖徒たちが受け継ぐ御国がどれほど栄光に富んだものか、そのことが心の目でよく見えるように、という内容です。でもこれも問題になる。私は牧師としてまことに恥ずかしいのですが、御国のすばらしさをわかっているとはとても言えません。心の目にも視力検査というものがあるなら、私の場合は、あ視力検査の表の一番上の記号でさえほとんど見えないほど悪い。いったいどうしたらいいのか。

3) 神のすぐれた力

「心の目」で何を見るか。その三つ目。19節。「また、神の大能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力が、どれほど偉大なものであるかを、知ることができますように。」

私たちがもし本当に疑わずに神を信じる事ができるなら、神のすぐれた力が働くというのです。けれども、神への望みもおぼつかないし、御国の栄光もよくわからない。そんな状態ですから、私に神の偉大な力が働くのとは信じられない。どうしたらよいのか。

ということで、いま、心の目で見ることについて三つのことを挙げましたが、結局「では、心の目を開くためにはどうしたらよいのか」、そこに行き着きます。

2 キリスト によって目が開かれていく

1) 死者の中からよみがえらせた

そこでパウロは、ヒントを書いている。20節。「この大能の力を神はキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせた。」

言いたいことはこういうことです。神の大能の力がよく分からないのなら、ではキリストを見なさ

い。キリスト十字架で死なれ、墓に葬られたけれど、そこからよみがえられたのはどうしてか。父なる神の大能の力が働いたから。だからキリストは、よみがえることができた。

私はかつてこのことを誤解しておりました。大切なことですので、改めて確認しておきます。「イエスが死からよみがえったのは、神だったのだから当然でしょう。自分の力でよみがえったのだ。」これは間違いです。この方は、いのちはもちろんですが、神の子としての権威、能力、すべてをお捨てになりました。それが十字架なのです。ですからイエスはご自分の力でよみがえられたのではありません。じゃ、どうやって死からよみがえられたのか。父なる神の大能の力によって、よみがえられました。その大能の力は、キリストだけではなく、実は私たちにも働かせてくださる。あなたはそのことを信じてよいのだと言っています。

2) ご自分の右の座に着かせた

では、そのよみがえれたイエスは今どこにおられて、なにをしているのか。20節の後半から21節。「天上でご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世だけでなく、次に来る世においても、となえられるすべての名の上に置かれました。」

キリストは父なる神の右の座に着いておられます。これはいままで何度も聞いてきたこと。でも疑り深い方はこんな質問するでしょう。「キリストが父なる神の右におられると、どうしてわかるのか。なにか証拠があるのか。」ちゃんと証拠があります。イエスは天に上げられる直前にこう語っておられた。ルカの福音書24章49節。「見よ。わたしは、わたしの父が約束されたものをあなたがたに送りますあなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」

それから七週間経ってペンテコステの日、大きな音を聞いて驚いて集まって来た群衆にペテロはこう説明した。使徒の働き2章33節。「ですから、神の右に上げられたイエスが、約束された聖霊を御父から受けて、今あなたがたが目にし、耳にしている聖霊を注いでくださったのです。」

ペンテコステの日、イエスが「わたしは、わたしの父が約束されたものを送る」と言われたとおりに、聖霊が父なる神のもとから送られてきました。もしキリストが父なる神の右の座に上らなかつたなら、聖霊は降りません。ところが実際は聖霊が降った。これによって、キリストが父なる神

とともにすべてのものを御支配しているのだと知ることが出来ます。

3 教会

1) キリストがかしら

ここで少しまとめます。「心の目を開くためにはどうしたらよいか」ということで、パウロは、キリストをよみがえらせた神の大能を見なさいと言いました。キリストはいま父なる神とともにすべてのものを御支配しておられる。それを見なさい。

でも、ピンときません。どれも頭としては「そうなのかな」とは思いますが、実感がありません。なにかもっと手で触れられるような、実感できるものはないのでしょうか。

そこでパウロが取り上げたのが教会です。教会には二つの特徴がある。その一つは22節後半。「キリストを、すべてのものの上に立つかしらとして教会に与えられました。」世の人たちから見れば、教会のかしら、すなわち責任者は牧師だということになります。しかし本当の教会のかしらは、すべてのものを御支配しておられるキリスト。この世界のすべてを御支配する方をかしらとする教会。これも頭では分かります。でもまだピンときません。

2) キリストのからだ

そこでパウロが最後の奥の手で出てきたのが23節。「教会はキリストのからだであり、すべてのものをすべてのもので満たす方が満ちておられるところです。」教会のかしらがキリストである。キリストは目に見えないので、かしらが見えないのは仕方がない。では、キリストのからだはいつどこにあるの。これも見えないのでしょうか。そのことについて4章16節にこう書いてある。「キリストによって、からだ全体は、あらゆる節々を支えとして組み合わされ、つなぎ合わされ、それぞれの部分はその分に応じて働くことにより成長して、愛のうちに建てられることになります。」

からだは、目や耳、口から始まって、いろいろな器官からできています。キリストのからだもこれと同じで、皆さんひとり一人がキリストのからだを構成する器官なのだということです。あるひとは目であり、ある人は耳、またある人は手であったり、足であったり。それぞれ違う働きをする。いろいろな人たちが集まっているのが教会。

3) 組み合わされていく

では人が集まれば、自然にキリストのからだができあがるのか。ここから大切なポイントをお話

しします。からだの一つ一つの器官はどんなふうにつながってるでしょうか。当たり前のことですが、人のからだはのりでくっつけたから出来上がるものではない。心臓、肺、胃や腸や肝臓や腎臓、その他いろいろな器官がきちんと調和して協力しながら動いています。からだはそうのようにできている。一つ一つの器官が全部むすびついていて、無駄なものはない。教会も同じだということです。人が集まれば教会が自動的にできるのではない。大切なのは、集められたひとり一人が組み合わせられ、つなぎ合わされていく。そうやってキリストのからだがつくられていく。

ですから、キリストのからだはどこにあるのですかと問われたら、こう答えることになる。「それは皆さんの交わりの中にあります。」イエスも言われました。マタイ18章20節。「二人か三人がわたしの名において集まっているところには、わたしもその中にいるのです。」

心の目を開くためにはどうしたらよいか。なにか難しいことを考える必要はない。教会の交わりを見てください。そこにキリストがおられます。私たちが受け継ぐ御国がどんなにすばらしいか、もっと知りたい。教会の中に御国のが始まっています。教会を見ればよい。御国が見えるならば、だれに言われなくても、ここに望みがあるとわかるようになる。どこか外を探する必要はないのです。全部、キリストが教会に与えてくださっている。だから「満ちている」と言われる。もちろん、教会がキリストのからだと言っても完全ではありません。ただいま建築中です。みなさんと一緒に「どんなすばらしい家になっていくのか」と楽しみにしています。望みがあるから楽しみにできる。気がつけばキリストがこのように私たちのうちに働いておられました。この方をかしらとして、また歩んでまいります。